

---

# 月刊宇宙人

牛方巴

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

月刊宇宙人

### 【Nコード】

N3214BA

### 【作者名】

牛方巴

### 【あらすじ】

「月刊宇宙人」という雑誌がある。

それを読む人は、みんなからつけられたキャラクターと自分の本当の姿とが食い違っている者たちだった。

月刊宇宙人を読み、変身を試みる人々を書いたもの。

一人につき二話完結

## 麻木海斗 前編

俺は、ちょっと変身してみたかった。

昔っから真面目キャラで、それが本当の俺と食い違っていて、たまにジョークなんか飛ばすとスゲーひかれた。

だから、変わって見たかった。

「月刊宇宙人」っていう雑誌を、俺は定期購読している。

俺は本当は変人だ。本とかよく読んでいるから真面目キャラと思われがちだけど、あれは全部表紙を付け替えたSF小説。変人と思われたくなくて、そうやって読んでいた。

クラスメイトが、「お前、実は変人なんじゃね？」とか言っていた。

「違うよ、そんなことないよ」って言うておいたけど、図星だった。

いつそのこと変わってみようかと思った。

「月刊宇宙人七月号」が届いた。表紙を見て俺は息をのんだ。

【真面目君は変人になれる！？宇津谷博士の大実験！！】

宇津谷博士は、月刊宇宙人のお抱えみたいな人だ。その博士が、変人キャラに変身できるというマシーンを開発したらしい。

俺は、変身を決意した。

## 麻木海斗 2

俺は、宇津谷博士のところへ行くことにした。

月刊宇宙人に載っていた宇津谷博士の住所を書き留め、よく晴れた日曜日の朝、宇津谷博士のもとへ向かった。

こういうのって、普通はアポとか取らなきゃいけないんだろうけど、そんなのどうでもよくて、とにかく変身したくて、ためていた三万円を握りしめて、【吟遊詩人通り】に行った。

宇津谷博士の自宅は、すぐにみつかった。紫色の屋根に、黄色の壁。ポストはグロテスクな緑で、芝生は真っピンクだった。形も見ることがないようなもので、模図かずおを抜いていた。

そして、なぜかここだけ人通りが少なかった。

インターホンを押すと、見たことのある顔がひょこつと出てきた。「あら、お客さんね。いらっしやい。月刊宇宙人の読者だね。君は変人になりたいのか。なるほど、まあ、上がんなさい」

宇津谷博士は、俺の言葉も聞かぬまま中へ入ってしまった。俺は立ちすくんでしまった。

「早く来なさいって。変わりたいんだろ。顔に書いてありますよ」

確かに宇津谷博士は変人だった。

家の中は真っ青で、機械とかパソコンとかよくわからないものとかがずらつとあって、書類があちこちに散らばっていた。

その奥に、雑誌に載っていた機械があった。

月曜日

「おい、あいつおかしいんだよ。今まで真面目君だったのに」  
「何言っただこいつ」

「ねえ、聞いてよ。俺さ、忍者が化けた猫に後をつけられているんだよ。ほんとだよ、信じるよ」

## 麻木海斗 2（後書き）

麻木海斗編、終わりました。

次回の予定 生野拓登

## 生野拓登 1

「おい、拓登。金貸してくれよ」

「ああ、いいよ」

「あ、俺にも！」

「ああ、わかったよ」

「サンキュー、拓登！必ず返すわ」

そういつて返してくれた人は一人もない。

僕はお人好しで知られている。お人好しだから引き受ける。お人好しだから代理で怒られる。お人好しだから使われる。お人好しだから金も貸す。そして、お人好しだから返されなくても怒れない。

お人好し。それが、僕の存在意義なのかもしれない。

お人好しじゃなかったら、僕は影にかすんでいただろう。皆と親しくなれなかったら。前はお人好しであることがいいことだと思っていた。

でも、最近、そうは思えなくなった。

物を運んでいる間。怒られている間。僕は、自分が何をしているかわからなくなる。

これが仲いいってことなのか？違うだろう。僕は自問自答する。

それで、次は貸さないぞって思っても、やっぱり貸してしまうお人好しだった。

僕は「月刊宇宙人」を定期購読している。

SFとか好きで、そのせいでいじめられていた。今は隠している

けど、ばらしたらまたいじめられるだろう。

変わりたくて、強くなりたくて 月刊宇宙人を読んでいるとちよ  
っと強くなれる気がする。

今月の月刊宇宙人に、とんでもないことが書いてあった。

「宇津谷博士の大成功 強くなりたい君へ」

思わず月刊宇宙人を握りしめてしまった。



## 生野拓登 2

僕は、扉の前に立っていた。

吟遊詩人通り九番地の宇津谷博信の家の扉の前に……

クシャクシャになってしまった「月刊宇宙人」には、宇津谷博士の実験結果と、住所が書かれていた。結果は、成功。喧嘩九連敗の人が、「女帝」と呼ばれる喧嘩最強クイーンに勝ったらしい。

これで僕も変わる。そう思って、宇津谷博士の家に向かった。博士の家は、なんというか、【まことちゃん】を書いた人の家に似ていた。

形は全然違うけど、発想は同じだと思った。

扉は、金色だった。迫力がすごかった。

と、後ろから肩をたたかれた。振り返ると、月刊宇宙人に載っていた顔があった。

「やあ、君。強くなりたいかね。なりたいんだね。入りなさい。強くなれるよ」

あっけにとられている僕の腕を引っ張って、宇津谷博士は家の中に入っていた。もう片方の手には大根が握られていた。

書類が散らばっている部屋をよく見ないうちに、黄色い扉の中に入れた。

指差された椅子に座ると、上から何かが降ってきた。

「拓登、金貸してくれよ」

「いいよ。でも、利子50パーで返してね」

「りょーかい！」

「もし返してくれなかったら」

「うぐっ  
「（；（；」

「  
「こうだから」

生野拓登 2（後書き）

生野拓登編、終わりました

次 橋本真依子

橋本真依子 1

あんたは宇宙人を信じるかい？

UFOに乗っているらしくて、でかい目をしたガリガリの丸坊主で、今でもいい大人たちがいるかないかで議論しているあれ。

信じている人もいるだろう。でも、あたしは信じてない。昔は信じていたけど。

それもこれも、全部父ちゃんのせいなんだ。

あたしの両親は、あたしがまだ幼いころに離婚したんだ。あたしは母ちゃんに育てられてきた。

でも、どっちかっていうと父ちゃんの方が気が合って、よく映画とか見に行った。その父ちゃんが、すごいSFマニアだったんだ。それで、あたしもSF好きになった。

でも、父ちゃんは女を作って出て行った。母ちゃんとはやっていけないって。すごいショックだった

。それからあたしはSF嫌いになった。

今は、SFとは腐れ縁だ。

中学からの友達に、瀬尾香里奈ってのがいる。そいつが、やっぱりSFマニアだった……

ある日、香里奈が雑誌を読んでいた。

「よお、香里奈。何読んでんの」

「ああ、真依子、おはよう。これね、定期購読限定で、書店とかそういうところには売ってないんだ」

香里奈には、無駄なことだけ先に話すっていう癖がある。

「で、なんていう雑誌なのさ。それを先に行つてよね」

「ああ、名前？これは、月刊宇宙人っていうんだ」

腐れ縁つてのは、どこまでも切れないから腐れ縁なんだ。  
やっぱりあたしとSFは切つても切れない縁らしい。

## 橋本真依子 2

数日後

あたしは、珍しく大型書店にいた。

もちろんSFは嫌いだけど、題名にちょっと引かれた。

最初は香里奈の言うことなんか信じていなくて、コンビニの雑誌欄を見ていた。

でも、なかったから、書店を回ってみた。

それだから、今あたしは紀伊國屋にいる。

一時間探し回っても「月刊宇宙人」つつうのはなくて、しょうがないからちよつとかつこいい店員に尋ねることにした。

「ああ、すま…じゃねえ、すみません。月刊宇宙人つつう雑誌ってない？」

店員は顔をしかめて、「それって、インターネットだけで取り扱われているんですよ。だから、パソコンで調べてください」と言っ  
てあたしを追い払った。

ネームプレートには【麻木海斗】って書いてあった。よし、こいつ三代まで呪ってやる。

最悪なことにあたしはパソコンを持っていない。ネットカフェに入るのはプライドに反するから、月刊宇宙人はあたしの心の中に留めておくだけにした。

来年からは就活が始まる。SFとの腐れ縁は続くかもしれないけど、しょうがないかもしれない。

気付けば紀伊國屋に来てから二時間たっていた。

S Fのためにここまでやったのは初めてだ。

電車で来たので駅へ向かった。

駅員のじじいの顔が、誰かに似ていた。

じじいがあたしを見た。そして、顎が落ちた。

あたしの顎も落ちてしまった。

橋本真依子 2 (後書き)

橋本真依子編、終わりました。

次回作で終了です

次回 滝本信彦



## 滝本信彦 1（前書き）

この「滝本信彦編」で、月刊宇宙人を終わらせようと思います。  
滝本信彦は、月刊宇宙人の編集者です。

## 滝本信彦 1

大晦日の除夜の鐘は、百八回なるらしい。

除夜の鐘をききながら、今年最後の百八つ目の記事を書き上げるのも、これが最後だ。

俺は、月刊宇宙人という雑誌の編集者だ。

月刊宇宙人は、ザ・スペースコーポレーションが発行する雑誌で、インターネット販売のみとなっている。取り上げる題材があれなので、読者も少ないのではと思っていたら、全国にまんべんなく読者がいて、全員を合計すれば東京都民と大阪府民を足しても越せないほどだった。

もともと俺は別の会社にいた。そこで「ねつ造写真の実態をつかむ」とかなんとかいう企画を行うことになって、ほかの会社に忍び込む役割が俺になった。

俺が目をつけたのが「ザ・スペースコーポレーション」。いかにも怪しいから、潜入取材を行うことにした。

しかし、スペコポー（みんながそう呼んでる）では、UFOの写真とかいうものを載せたりはしなかった。というか、中身が魅力的で、雰囲気其自然で、俺は前の会社を辞めてスペコポに入った。

ここでは、宇宙人がいたらどんなものなのかとか、宇津谷博士という人の実験結果を載せたりだとか、その他科学的ないろいろを書くだけで、偽物のことは何一つ書かなかった。

おれは、月刊宇宙人で毎年九十六個の記事を書くのを任された。一回の雑誌で八つの記事。そう簡単ではないけれど、やっぱり面

白かった。

あるとき、小説担当の人が定年退職した―（なぜか小説は自分たちで書くものだった）。

次の小説担当に俺は名乗り出た。一瞬で決まり、九十六個が百八個に変わった。

その俺がなぜ今年で仕事が終わってしまうのかって？  
有名な某出版社から連絡が来て、小説家への道が開けたからさ。

滝本信彦 1（後書き）

今回は、3つに増えるかもしれません。

## 滝本信彦 2

「お前が書いた小説が評価されたつてよ。で、ちゃんな仕事やってないで小説書いてみないかって、兄貴が言ってたぜ。どうだ、やってみないか」

銀髪オールバックを撫でつけながら、編集長がそういったのは、あと一か月で年が変わるって時だった。

編集長のお兄さんは、某出版社に所属している。そのお兄さんが俺の小説を読んで、声をかけたらしい。

「で、でも、俺、まだここで仕事したいし、それに、小説なんて……」

「あのよ、お前よ、おめえ小説家目指してたんだつてな。いいじゃねえか。やってみるよ。お前ならできるはずだぜ」

凶星だった。

俺は幼いころから文学少年だった。将来の夢は小説家で、新人賞に応募して最終候補まで行ったこともある。

それでも夢破れてで、スペコポにいる。

「まあ、すぐになれとは言わねえけどよ。年越しまでにお前の返事を聞きてえな」

そう言つと、編集長は扉を指差した。俺は軽く頭を下げた家路についた。

ふかふかのソファに寝そべっている間も、俺の頭はこんがらがっていた。

小説家への道が見えたのはうれしかった。でも、やはりここで仕

事をしていたい願望もあった。

もし、ここで小説家をあきらめたらどうなるだろう。

六十過ぎまで月刊宇宙人で仕事して、まあまあの給料もらって、田舎で老後を過ごす。

悪くないけれど、俺の名前が後世に残るわけではない。

結局、十二月も後半になるまで、答えは出なかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3214ba/>

---

月刊宇宙人

2012年1月8日19時54分発行